

文化財よもやま話

七夕

「七夕」は、牽牛星と織女星が一年に一度会うことのできるロマンティックな日とされています。牽牛星はわし座のアルタイル、織女星は琴座のベガのことです、二つの星は天の川をはさんで向かい合っています。誰しも、この日が晴れるようにと、願ったことがあるでしょう。

しかし、一方で、七夕の日は少しでも雨が降るものだ、とする伝承は少なくありません。多くの土地で「必ず雨が降るものだ」「少なくとも3粒は降るものだ」などと伝えており、中野区でも鷺宮では、七夕の日の午前10時に雨が降ると、病人が少ないといわれています。

七夕には水に関係する行事がたくさんあります。雨が降るとする伝承もそうですが、例えば年に一度井戸替えをする、水浴びをする、しかも人間だけではなく牛を川で洗うという地域もあります。これらは水を浴びることによって身を清めるという、禊の行事としての性格をあらわしています。

実は、よく知られた七夕の伝説は、中国から伝来したお話なのです。この星の祭りの七夕に対して、民間では数々の日本固有の習俗が行われていました。年中行事の中で7月7日は、7月15日を中心とする盆行事の一つとして考えられています。例えば、7日は「七日盆」と呼ばれ、盆の始まる日とされました。祖靈でもある七夕様が乗る乗物として、藁や茅で藁馬を作る地域も多く、鷺宮でも稻藁が入手できた昭和30年代頃まで藁馬は作られていたのです。



大地に眠る歴史

発掘調査はどうやるか(その3)

発掘調査はどうやるか、3回目になります。前回まで、遺構の掘削一観察一写真撮影一実測図という一連の作業についてお話をしました。

さて、遺跡では、遺構の他に発見されるものとしては遺物があります。遺物とは人類が使用して残した、土器・石器・木器・金属器など、すべてのものを対象としています。

考古学において、遺物の取扱いはまず、どこでどのような状態で遺跡から発見されたかが重要になります。したがって、出土したからといってすぐに取り上げたりしてはいけません。

移植ゴテで土を掻いでいるところ、カチッといった感触で土器などが検出されます。その後は、まわりの土を刷毛や串などを用いて丹念に取り除き、全体の姿を出していきます。そしてブラシで水洗いをして出土状態の写真を撮影します。それから実測をして、出土した標高を計測します。これらの記録をすべて済ませたら、いよいよ取り上げ作業にはいります。取り上げは慎重にこわれないようビニール袋や箱に収めて完了となります。



遺物の中には、大変遺存状況が悪いものもあります。写真は、江古田一丁目の御嶽遺跡で発見された江戸時代初頭の漆塗りの椀の検出作業です。

本製品はきわめて条件のよい環境でないと腐敗して消滅します。そのため、かなり柔らかな状況で発見される場合が多いのです。その時はまわりを石膏でかためて、土ごと取り上げ、その後、科学的な保存処理をします。

(つづく)

古文書フアリ

野生の鹿を捕まえる

人とのつきあいが深い動物は数多います。犬猫鼠や牛馬猿猪鹿はその代表でしょう。家やビルがたちならぶ現在からは想像しにくいのですが、江戸時代の中野村は鹿も棲むような所でした。

鹿といえばなにやら優雅なイメージがありますが、農林業にとっては食害をひきおこす厄介者です。しかし将軍などが鷹狩の折、ついでに狩ったりするため、気軽に駆除できるものでもありません。当然さまざまな制約がかかります。

今回の文書は鹿の生捕りを中野村の甚兵衛が請負う条件を書上げたもの。鹿5頭を生捕って引渡し、費用などのために20両を受けることが取決めています。最初に1頭あたり4両としながら、後半部分では5頭以上捕まえても追加金なしで引渡すと明記してあり、契約に対する感覚の一端をのぞかせます。この史料からは、生捕りの理由やどのくらいいたのかといったことは判りませんが、



「百姓」であって「獵師」ではない甚兵衛には鹿を獲物として利用する権利がないこと、生捕った鹿は鷹野役所の管轄になることがみてとれましょう。実はこの他にも鹿を追払う費用を書上げた文書が残っており、ある程度長期間にわたって人間の生活領域から排除していたと思われます。

今、中央線と青梅街道がはしる辺りは、かつて鹿の様に大きな動物も住める環境でした。

鹿…「肉」を意味する「しし」をつけ「かのしし」ともいい、猪と共に代表的獣肉とされた。一般に美味。漢文学において帝位や隠者を含意することがあり、日本文学では恋しい人を呼求める気持の象徴。また、春日・鹿島・厳島の神の使とされる。

中野往来

しんみぶぜんのかみまさおき
新見豊前守正興の墓 上高田4-10-1
願正寺墓域内

正興は、文政5年(1822)、幕府先手頭三浦美作守義昭の次男として生まれ、後に新見伊賀守正路の養子となりました。天保10年(1839)に小姓として初めて出仕し、同14年に中奥小姓に転じ、嘉永元年(1848)には、家督を継ぎました。安政元年(1854)小普請組支配、同3年小姓組番頭を経て、同6年7月外国奉行になり、8月には神奈川奉行も兼ねました。そして同年9月、日米修好通商条約批准書交換のための遣米使節正使に任命されました。翌万延元年(1860)副使村垣範正、立会の日付小栗忠順以下70余人を従え、アメリカ船ポーハタン号に乗り、勝海舟率いる咸臨丸と共に品川を出港しました。この幕府初の外交使節の目的は、ワシントンでの批准書交換にありましたが、それとは別に海外視察や同行させた咸臨丸の航海実習という使命もありました。重責を果し、一行は大西洋経由で帰国しました。正興は、その功績

によって、300石を加増され、禄高は2300石となりました。しかし、国内の情勢が急変し、攘夷論が盛んとなり、外国での見聞を生かす機会もなく、文久2年(1862)側衆となり、元治元年(1864)には職を免ぜられました。慶応2年(1866)に隠居し、父正路の子であり、自らの養子とした正典に家督を譲りました。その後、明治2年(1869)10月18日、49才で病没し、当時牛込原町(新宿区)にあった願正寺に葬られました。

大正7年(1918)にモーリス、アメリカ全権大使が墓を訪問しました。また昭和35年(1960)には、日米修好通商条約締結100周年記念式典が行われ、駐日大使ダグラス・マッカーサー二世が訪問、日米親善の記念植樹がなされました。日本側から出桜、アメリカ側からはハナミズキが植えられ、今でも記念碑と共に残されています。

共に葬られている父正路は、大坂西町奉行を勤めた後、天保12年(1841)天保の改革の際、徳川家慶の御側御用取次に起用されました。正路は、蔵書家としても有名で、邸内に所蔵した書籍などを収めた、賜蘆文庫を設けていました。

事業報告

各種事業経過

1998年4月～6月

事業名	内 容	期間
企画展	「新収蔵浮世絵にみる三代豊国とその弟子たち」	5/1～5/31
史跡めぐり	「中央・本町コース」 講師：角田茂氏（中央大学大学史編纂課）	4/25
歴史講座	新発見中野区史 「旧石器人の足跡」 講師：渡辺丈彦氏（慶應義塾大学大学院博士課程） 「激動の弥生・古墳時代」 講師：比田井克仁（当館主任学芸員） 「知られざる中世の中野」 講師：比田井克仁（当館主任学芸員） 「天正検地帳は語る」 講師：落合功氏（広島修道大学専任講師）	6/6 6/13 6/20 6/27
文化財調査	新井・上高田地区民俗調査 新井・上高田地区民俗調査報告書刊行作業	継続中 4/1～
埋蔵文化財調査	江古田遺跡（旧国立療養所中野病院跡地）発掘調査 江古田遺跡（旧国立療養所中野病院跡地）調査報告書刊行作業 本田山遺跡調査報告書刊行作業 寺山西遺跡（ベタニアホーム地区）調査報告書刊行作業 中野区保健施設建設予定地確認調査 若宮一丁目民有地確認調査 弥生町五丁目民有地立会調査 丸山二丁目民有地立会調査 松が丘一丁目民有地立会調査 江原町二丁目民有地確認調査 江原町一丁目民有地立会調査	～4/30 5/1～ ～6/30 継続中 6/15～6/22 3/18 3/25 4/1 4/15 5/6 5/14

* 民有地の立会および確認調査については1998.3～5までとする

NEWS

* 次回企画展示

「遺跡は語る一大地に眠る歴史」

これまでの遺跡発掘調査の成果を一挙に展示します。夏休み体験コーナーもあります。

7月18日から8月30日まで。

* 夏期所蔵品展—染付の美—

1F特別展示室では7月から9月まで、古伊万里を中心に陶磁器を展示します。中野に残された名品の数々をご堪能ください。

* 郷土学習相談室を開設

8月25日から27日まで、区内在住の小中学生を対象に郷土学習相談室を開設します。

中野について考えていきましょう。

開設時間 10:00～12:00／13:00～15:00

(受付は9:30より)

人事異動

3月31日付勤労福祉会館へ小島満子異動

▷後任4月1日付建築課より藤山裕子着任

入館状況

1998年3月～5月（76日間） (人)

一般	社教団体	学校教育	合計
7,760	239	1,050	9,049

発行年月日 1998年7月1日

編集・発行 山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 10中教社第4号)